

## コロナ禍に思う — まるでSF のよう? !

東京都国立市 中西景子

東京は4月7日に緊急事態宣言が発令され、約一ヶ月半後5月25日に解除されました。長いようであつという間でした。

自粛生活が始まった3月、楽しみにしていたコンサートやイベントが次々に中止になり、映画館、美術館も閉館し、がっかりです。市の広報掲示板は貼るスペースがないほど常にイベント花盛りなのに、今はガラ空きです。4月に開催予定だった国立市主催の旧国立駅舎リニューアルオープン記念企画も中止に。私の勤務する社会福祉法人も賛同し、お話し会を開く予定でしたが当然中止です。

私が新型コロナウイルスのことを知ったのは2月初旬だったでしょうか。その後はご存知、瞬く間に事態は深刻さを増していきました。テレビは連日コロナのことばかり。ロックダウン、クラスター、オーバーシュート等々、耳慣れない言葉が飛び交い、気が滅入るのでテレビを見るのは止め、Amazon プライム（動画配信サービス）で息子の見る映画やアニメを一緒に見ていました。

息子は、年明け以降、大学入試に向けて巣ごもり生活だったので、3月に学校が休校になっても、ほぼ影響はなかったのですが4月、新年度になると大学の入学式やオリエンテーションは中止になりました。1度も学校に足を踏み入れないまま、ようやく6月からオンライン授業が始まりました。

世間では、リモート〇〇やZoom〇〇等の新しい手法が定着しました。ピアノ教師の友人は、子どもたちとリモートレッスンを楽しくやっています。私もPTA 役員会のZoom 会議を経験しました。コロナ禍のおかげで何十年ぶりかに従姉妹とFaceTime（テレビ通話）で話すという嬉しい出来事もありました。離れていても、つながろうとする我々人間の、転んでもタダでは起きない逞しさ！

夫の職場は、4月からリモート勤務が始まり、週の半分は在宅勤務で、しょっちゅうZoom 会議。しかも1日何本も。先日は、社員採用面接もZoom でやっていました。

タコライス。上が私で、下が息子作。  
先週、勤務先のグループホームの昼食作りに助っ人に入った。息子作のは同じ日のおうちご飯。  
出がけにレシピを見ていたら、息子が自分も作りたいと言うので、レシピとお金を渡したら、食材を買ってきて作ってくれた。

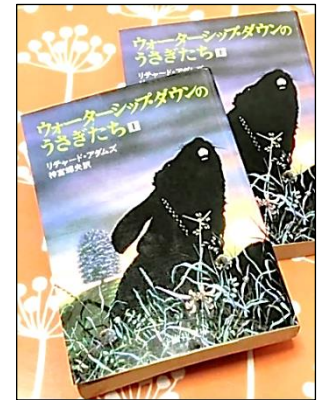


私はというと、家にいる時間が増えたので、長年手つかずだった部屋の大掃除やドクダミ、ミントのはびこる庭の手入れができ、胸のつかえが少し取れました。

一番時間を費やしたのは、Facebook (FB) や Instagram (インスタ) など SNS でした。FB がもっぱら私の情報源なのですが、藤原辰史氏の岩波新書編集部への寄稿「パンデミックを生きる指針 — 歴史研究のアプローチ」や、船橋真俊氏のソニーCSL のメルマガへの寄稿「表土とウイルス」等、いずれもFB でつながっている友達の投稿で知りました。

「ステイホーム」中に流行った「おうち時間」を楽しむための「〇〇チャレンジ」という SNS の仕掛けには感心しま

した。様々なテーマ、たとえば自分の幼少時の写真、料理レシピ、LP ジャケット等のリレートークです。私が参加した「7日間ブックカバーチャレンジ」もその1つ。これは「読書文化の普及に貢献するためのチャレンジ」で、台湾からはじまったとか。参加方法は、好きな本を1日1冊、7日間投稿するというもの。本についての説明なしに表紙だけの画像をアップし、毎回1人のFBまたはインスタの友達をこのチャレンジに招待するというのがルールです。私は、自分の若かりし頃の愛読書等から、サン・テグジュペリ『星の王子さま』、レイ・ブラッドベリ『10月はたそがれの国』、東直子『とりつくしま』、村上春樹『村上朝日堂』、赤瀬川源平『超芸術トマソン』、ネクラソフ『愛かぎりなく』（いわさきちひろ画）、リチャード・アダムズ『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』を挙げました。部屋を片付けつつ本を選び、バトンを渡す相手を探すのはとても楽しい作業でした。



それから、私は縁あって国立市の図書館協議会委員を一昨年10月から（任期2年）務めており、任期満了を半年後に控え、協議会として今期の報告と提言を図書館長へ提出するために現在、テーマの絞り込みをしています。5月は会議ができず、書面会議になりました。図書館が長期休館になり焦りましたが、職員の方に相談して資料を借りることができ、過去の提言に目を通したり、やまびこ文庫の主宰者の代田さんに薦められて竹内愨著『生きるための図書館』岩波新書を読んだりしました。図書館は、その設立以前から現在に至るまで、市民が大きく関わっていることがわかりました。その歩みは市民と図書館の協働の歩みそのもので、図書館設立の原動力は、子どもたちの育ちに必要なものを真剣に考えて学習し、実践した家庭文庫活動だったことを知り、感銘を受けました。

また、私は、おはなしボランティアの勉強を7年前に始め、翌年から、くにたちおはなしの会に所属しています。数年前から会主催「大人のためのおはなし会」、図書館主催「おはなしのじかん」や小学校等で、少しずつ語るようになりました。学校や図書館の休館にともなって活動がストップし、子どもたちに語る場を失ってモチベーションを保つことの難しさを感じます。自主グループの仲間たちとは4月に1度、公園で集まった他、LINEで情報交換などをして励まし合っています。

にわかには信じがたいこの状況は、まるでSFのようで、いまだに信じられません。以前はマスクなど効果ないと思っていましたが、今はマスク無しでの外出は憚られるように。ジワジワと洗脳されていく、まるでフランク・パブロフの『茶色の朝』のようです。

これからは「ウィズ・コロナ」の時代と言われ、山中伸弥氏もウイルスとの共存を提唱。ウイルスを悪者扱いせず、ウイルスの宿主である私たちが変わることが求められているのではないのでしょうか。効率や利益を優先せず、手間と愛情をかけて作られた本当の食べ物を食べ、ワクチンや薬に頼らず免疫をつけ、環境を整えることが必要だと思うのです。早く日常を取り戻したいですが、もとの大量生産、大量消費の生活には戻ってはいけません。ウイルスを過剰に恐れるあまりの弊害についてもよく考えなくてはなりません。人間の経済活動が縮小したことによって自然が本来の姿を取り戻している自粛生活も、案外悪くないというのが私の感想です。

2020年 6月5日